

子ども防災マイスター 2015 プログラム

災害直後の対応（行政・市民・マスコミ）⇒避難所運営⇒仮住まい⇒復興まちづくりへのプロセスを、子ども達が、自ら考え、活動しました。

STEP1 こどものまちで被害が！ そのときどうする？



○行政・市民・マスコミ役になって、大震災3日目の、こどものまちの対応を考える

【行政班】

被害状況（家屋倒壊 / 延焼火災 / 道路寸断など）や、関係機関動きなどの付与条件のもとに、サバイバル市役所災害対策本部として、今、優先して何をしないといけないか、広報すべきことは何か、考えました。

【市民班】

家が全壊・全焼した家族や、高齢者のみ世帯など「ロール」を設定し、その役になったつもりで、状況を想像し、自助・共助・公助それぞれ何が出来るか考えました。

【新聞社記者】

行政班の対応や市民の様子を取材して、壁新聞をつくりました。「市民が今、何に困っているか」や、今必要な情報は何か考えながら取材しました。

STEP2 こどものまちの防災資源・被害状況を確認！ （西戸部まちあるき）



○こどものまちの半分は、高低差のある木造密集市街地。西戸部のまちづくりを、あるきながら学ぶ。



●細い道、高低差、階段……途中で細くなったり階段のある道も多かったため、車や高齢者が通れる道かチェックして歩きました。

●熱心に防災まちづくりにとりくむまちの人の話をきいて、狭い空き地等で防災訓練をしたり、雨水利用や井戸、災害時を考えた公園、消火設備を、みんなで協力して整備している様子を見学しました。



STEP3 こどものまちの避難所をイメージしよう

○避難所を子どもで運営して被災者役の大人を誘導しよう



【避難所のレイアウト計画図】



【HUG ゲームで学んだことを活かして、避難してくる人を想像しながら、レイアウトの計画をつくります】



【わかりやすいサイン計画】

○仮住まいを、子どもの視点で考え、計画してみよう！

食堂や風呂などを一部共有にする、車椅子の人が入りやすく周囲とコミュニケーションがしやすい各戸アプローチの計画や、遊び場や集いの場を意識した全体レイアウトなど。大人の「当たり前」を超えて、子ども達は自由に、自然に、豊かな発想で表現していました。



【家族構成や集いの場を考慮した仮設住宅のレイアウト案】



【ダンボールで原寸大仮設住宅づくり】



【手作り地震計教室】

○こどものまちの復興を考え、計画してみよう！

地震と火災で大きな被害を受けた地区を例に、被害の状況や地形、空き地、地域資源などを参考にして、復興まちづくりのアイデアを出し合いました。大人班と子ども班の発想の仕方の違いが明確に出て、復興まちづくりに子どもの視点やアイデアを取り入れる大切さを実感しました。ただし、プログラムが盛りだくさんになり、復興まちづくりを考える時間や余裕が不足してしまったので、今後は、それぞれ内容を絞っていくことも必要だとわかりました。



【復興まちづくり案へ専門家のアドバイス】



【子ども達が考えた計画案】

STEP4 こどもが災害時に活躍するアクションプランをつくろう



【情報班：避難者の特徴を含めたリストや、避難所新聞を作成】



【障がいのある方にどのように対応するか、受付で聞き取っています】



【物資設営班：病気の人、妊婦さん、高齢者・・・困っている人のニーズに、優しく的確に応えようと考えます】